

資本論 小辭典



岡崎次郎著

現代教養文庫

1054

資本論小辞典

岡崎次郎 著

社会思想社

著者略歴

岡崎 次郎（おかざき じろう）

1904年 北海道に生る

1927年 東大文卒。1929年 東大経卒。

満鉄調査役。九州大教授。法政大教授等歴任。

《著書》 経済原論（法政大出版局）。資本論入門（大月書店）等。

《訳書》 資本論（大月書店）。金融資本論（岩波書店）等。

《現住所》 東京都渋谷区宇田川町36-2-1102

〈お願い〉

☆現代教養文庫の定価は、すべてカバーに明記してあります。

☆万一、落丁乱丁の場合は、直接小社にお送りくだされば早速お取替します。

© Jiro Okazaki 1981

Printed in Japan

現代教養文庫 1054 資本論小辞典

1981年10月30日 初版第1刷発行

著者 岡崎 次郎

発行者 小森田 一記

発行所 株式会社 社会思想社

(113) 東京都文京区本郷1の25の2¹

電話代表 (03) 813—8 1 0 1

振替東京 6 7 1 8 1 2

0130—11054—3033

凸版印刷・田中製本

序 文

この小辞典は、資本論のなかに現われるマルクス経済学に固有な用語（または一般的な経済用語でも資本論では特に意味を厳密に規定されて用いられているもの）を五十音順に配列して、これにできるだけ簡単明確な説明を加えたものである。個々の用語（特に項目の見出しとされているもの）にはすべて原語が付記してある。それらの用語の邦訳は各種の邦訳書によって若干異なるものがあるが、この辞典ではすべて大月書店版（マルクス＝エンゲルス全集版、資本論全巻セット普及版、国民文庫版）の訳語を採用した。現行の邦訳書としては同書店版が最も広く流布しているからである。したがって、引用文末尾のページ数は国民文庫各分冊のページ数である。しかし、異なる訳語でも他の邦訳書のなかでかなり多用されているものは、これを別の見出し語として採録し、それと同義の本辞典中の項目を→印で指示してある（たとえば、物神性→呪物性）。説明文中の括弧内に第○巻第○章と付記してあるのはすべて資本論の巻別と章別とを意味する。なお、個々の用語の意義については研究者によって解釈を異にするものも多いが、本辞典では種々の見解を列挙することはせず、編者が最も一般的と考えるもの（資本論全巻を通じて論理的に矛盾なく妥当すると考えられるもの）だけを採録した。（種々の見解の相異点については青木書店版《資本論辞典》によってある程度まで詳しく知ることができる。）巻末に収録した《資本論》解題と〈カール・ハインリヒ・マルクス略伝〉とは、社会思想社版《現代マルクス＝レーニン主義事典》中の編者担当の項目〈資本論〉と〈マルクス、カール〉とに若干変更を加えて再録したもので簡略ながら資本論とその

著者マルクスの生涯とについて一応の知識を提供することを意図したものである。なお本書では必要と思われるすべての用語を目次に掲載して、独立項目として説明を加えてないものでも、その説明を含む他の項目を→印で指示してあるので、この目次をそのまま索引としても利用しうるものと考え、特別な索引は作成しなかった。

1981年6月

岡崎次郎

目 次

イ

- 異種的マニユファクチャ → マニ
ユファクチャ (231)
- 一般的価値形態 → 価値形態 (17)
- 一般的生産価格 → 市場生産価格と
超過利潤 (92)
- 一般的等価形態 → 価値形態 (17)
- 一般的利潤率 → 平均利潤 (224)

ウ

- 運輸費…………… 1
- 運輸労働 → 運輸費 (1)

カ

- 回転期間 (資本の) → 資本の回転
(108). 生産期間と流通期間 (資
本の) (162)
- 回転循環 → 前貸資本の総回転
(229)
- 価格…………… 2
- 価格の度量標準 → 価値尺度 (26)
- 架空資本 (擬制資本) → 利子生み資
本 (234)
- 拡大再生産…………… 3
- 拡大再生産表式 → 再生産表式 (76)

- 貸付資本…………… 10
- 過剰生産…………… 11
- 過剰蓄積 → 過剰生産 (11)
- 価値—商品価値…………… 15
- 価値形態…………… 17
- 価値尺度…………… 26
- 価値章標 → 紙幣 (96)
- 価値生産物 → 剰余価値率 (153)
- 価値増殖過程…………… 28
- 価値法則…………… 32
- 家内労働…………… 33
- 貨幣…………… 34
- 貨幣資本 → 資本の循環 (112)
- 貨幣資本家…………… 39
- 貨幣呪物 (貨幣物神) → 呪物性 (物神
性) (130)
- 貨幣蓄積…………… 40
- 貨幣地代…………… 42
- 貨幣としての貨幣…………… 44
- 貨幣取引資本…………… 45
- 貨幣の資本への転化…………… 45
- 可変資本 → 価値増殖過程 (28)
- 可変資本の回転…………… 53
- 監督賃金…………… 53
- 監督労働 (管理労働)…………… 54

キ

- 機械…………… 55

企業者利得.....	57
機能資本家.....	58
協業.....	58
恐慌.....	59
共産主義.....	61
虚偽の社会的価値.....	62
銀行主義 → 通貨主義・銀行主義 (201)	
銀行信用・銀行券.....	64
近代的家内労働.....	67

ク

苦汗制度.....	68
具体的有用労働 → 労働の二重性 (259)	

ケ

経済外的強制.....	69
原始共同体制.....	70
建築地地代.....	71
現物地代 → 生産物地代(165)	

コ

交換価値 → 価格(2). 価値—商品価値(15). 価値形態(17). 貨幣(34)	
鉦山地代.....	72
工場内分業 → 分業(222)	
固定資本と流動資本.....	72
古典派経済学と俗流経済学.....	75

サ

再生産表式.....	76
差額地代.....	83
産業資本.....	87
産業循環.....	87
産業予備軍 → 相対的過剰人口(177)	
三位一体的定式.....	89

シ

自営農民.....	90
時間賃金 → 労賃(249)	
市場価格 → 需要供給関係・市場価格 (132)	
市場価値.....	91
市場生産価格と超過利潤.....	92
支払手段.....	94
支払労働と不払労働 → 必要労働と 剰余労働(213)	
紙幣(国家紙幣または政府紙幣)...	96
紙幣流通の独自の法則 → 紙幣(96)	
資本 → 貨幣の資本への転化(45)	
資本家 → 貨幣の資本への転化(45)	
資本家的借地農業者.....	98
資本関係.....	99
資本還元 → 利子生み資本(234)	
資本主義.....	100
資本主義的生産過程.....	101
資本主義的生産の総過程.....	104
資本主義的蓄積の一般的法則...	105

資本主義的蓄積の歴史的傾向…	106	集積と集中(資本の)……………	128
資本主義的地代 → 地代(194)		収入の遊離と拘束……………	129
資本呪物(資本物神) → 呪物性(物神性)(130)		呪物性(物神性)……………	130
資本の一般的定式 → 貨幣の資本への転化(45)		需要供給関係・市場価格……………	132
資本の回転……………	108	商業資本……………	135
資本の価値構成 → 資本の構成(109)		商業信用・商業貨幣……………	136
資本の技術的構成 → 資本の構成(109)		商業利潤……………	138
資本の構成……………	109	商業労働……………	141
資本の再生産過程と流通過程…	111	商人資本 → 商業資本(135)	
資本の循環……………	112	小農民的借地農業者……………	142
資本の生産力……………	115	商品……………	143
資本の増価と減価(価値増大と価値減少)……………	116	商品在庫 → 流通費(245)	
資本の大洪水以前の形態……………	117	商品資本 → 資本の循環(112)	
資本の蓄積過程……………	119	商品生産……………	144
資本の有機的構成 → 資本の構成(109)		商品取引資本……………	148
資本の遊離と拘束……………	120	商品の変態 → 商品流通(148)	
資本の流通過程 → 資本の再生産過程と流通過程(111)		商品流通……………	148
社会的価値と個別的価値……………	121	剰余価値……………	151
社会的総資本の再生産……………	121	剰余価値の年率……………	151
社会的必要労働時間 → 価値法則(32)		剰余価値の流通……………	152
社会的物質代謝 → 商品流通(148)		剰余価値の量と率との関係 → 剰余価値量(154)	
社会的分業 → 分業(222)		剰余価値率……………	153
社会的平均労働……………	125	剰余価値量……………	154
社会的欲望……………	126	剰余労働 → 必要労働と剰余労働(213)	
借地料……………	127	剰余労働の歴史的諸形態……………	156
		人口法則……………	158
		信用・信用制度……………	158
		信用貨幣 → 銀行信用・銀行券(64). 商業信用・商業貨幣(136). 中央銀行券(196)	

セ

生産価格	159
生産過程	161
生産関係 → 生産様式(165)	
生産期間と流通期間(資本の)...	162
生産資本 → 資本の循環(112)	
生産手段 → 生産過程(161). 生産様式(165). 労働過程(251)	
生産的消費 → 生産過程(161). 生産様式(165)	
生産的労働	164
生産物地代	165
生産様式	165
生産力 → 生産様式(165)	
世界貨幣	170
絶対地代	171
絶対的剰余価値	173
節欲説	176
潜在的貨幣資本 → 貨幣蓄積(40). 剰余価値の流通(152)	
潜勢的貨幣資本 → 貨幣蓄積(40). 剰余価値の流通(152)	

ソ

相対的過剰人口	177
相対的剰余価値	181
俗流経済学 → 古典派経済学と俗流経済学(75)	

タ

大工業	186
兌換準備制度	187
単純再生産	189
単純再生産表式 → 再生産表式(76)	
単純な協業 → 協業(58)	
単純労働と複雑労働 → 労働の二重性(259)	

チ

蓄蔵貨幣	193
地代	194
地代率	195
中央銀行券	196
抽象的人間労働 → 価値—商品価値(15). 労働の二重性(259)	
鑄造貨幣(鑄貨)	199
超過利潤 → 市場生産価格と超過利潤(92)	
直接的生産過程	200

ツ

通貨主義・銀行主義	201
-----------	-----

テ

出来高賃金 → 労賃(249)	
-----------------	--

ト

等価交換	202
独占価格	203
独占地代	204
特別剰余価値 → 相対的剰余価値 (181)	
土地価格	204
土地資本	206
土地所有	207
奴隸制	209

ノ

農奴制	210
農民の分割地所有	212

ヒ

必要労働と剰余労働	213
費用価格と利潤	216

フ

不換銀行券	219
物質的生産諸力 → 生産様式(165)	
物神性 → 呪物性(130)	
不変資本 → 価値増殖過程(28)	
ブルジョア経済学	220
分益農制	221
分業	222

分配関係	223
------	-----

ヘ

平均地代率 → 地代率(195)	
平均利潤	224
平均利潤率 → 平均利潤(224)	

ホ

封建的地代 → 本源的地代形態(228)	
封建的土地所有 → 農奴制(210)	
補助鑄貨(補助貨)	226
本源の蓄積	227
本源的地代形態	228

マ

前貸資本の総回転	229
マニユファクチャ	231

ユ

有機的マニユファクチャ → マニユ ファクチャ(231)	
---------------------------------	--

リ

利子・利子率	232
利子生み資本	234
利潤 → 費用価格と利潤(216)	
利潤率	235

利潤率の傾向的低下の法則……	239
流通期間 → 生産期間と流通期間(資本の) (162)	
流通資本 → 固定資本と流動資本 (72). 生産期間と流通期間(資本の) (162)	
流通手段 → 貨幣(34). 紙幣(96). 商品流通(148). 鑄造貨幣(鑄貨) (199). 流通手段としての貨幣の量と流通速度(244)	
流通手段としての貨幣の量と流通速度……	244
流通費……	245
流動資本 → 固定資本と流動資本 (72)	

レ

隷農……	248
------	-----

ロ

労賃……	249
労働過程……	251
労働手段 → 生産様式(165). 労働過程(251)	
労働対象 → 生産様式(165). 労働過程(251)	
労働地代……	253
労働の強度……	254
労働の自然的生産力……	254
労働の社会的生産力(社会的労働の	

生産力) ……	255
労働の生産性(または生産力)…	256
労働の二重性(商品に表わされる労働のそれ) ……	259
労働日……	260
労働力の価格……	261
労働力の価値……	262
労働力の売買 → 貨幣の資本への転化(45)	
ロビンソン物語……	263
《資本論》 解題……	266
カール・ハイน์リヒ・マルクス 略伝……	285

イ

異種的マニユファクチャ → マニユファクチャ

一般的価値形態 → 価値形態

一般的生産価格 → 市場生産価格と超過利潤

一般的等価形態 → 価値形態

一般的利潤率 → 平均利潤

ウ

運輸費 Transportkosten

一般に、商品の形態転化または価値実現のためにのみ費やされる〈流通費〉は商品に価値を付加しない。これに投ぜられる資本は、資本主義的生産の空費に属し、資本家階級から見れば剰余価値からの控除である。しかし、運輸費はこれとは異なる。運輸は流通过程に延長された生産過程である。生産物の使用価値は運輸によっては質的にも量的にも変化しないが、使用価値はただ消費においてのみ実現されるのであり、消費のためには生産物の場所的移転、すなわち〈運輸〉という追加的生産過程を必要とすることがありうる。言い換えれば、場所的移転そのものが〈運輸労働〉と〈運輸手段〉とによって生産される使用価値である。それゆえ、運輸のために投下された資本は、運輸手段からの価値移転および運輸労働による価値付加によって生産物に価値を追加するのである。したがって、運輸労働は剰余価値をも生産しうるのであって、商品生産の一般的法則は運輸にもあてはまる。

→ 流通費。

運輸労働 → 運輸費

力

回転期間（資本の）→資本の回転・生産期間と流通期間（資本の）

回転循環 →前貸資本の総回転

価格 Preis

価格は本質的には商品に対象化されている労働の貨幣名なのだから、一定量の商品の価格の意味する貨幣量には、その商品に含まれているのと等量の労働が含まれているはずである。簡単に言えば、その商品の価値量と、その商品の価格によって表わされる貨幣量の価値量とは等しいはずである。たとえば1キログラムの米と0.2グラムの金とには等量の社会的必要労働が含まれているとし、0.2グラムの金の貨幣名をx円とすれば、x円は1キロの米の価値量の表現であり、〈米の価格〉である。そして、産米労働か産金労働かのいずれかの生産性に変化がないかぎり（つまり米か金かの価値に変動がないかぎり）、または両方の労働の生産性に変化があっても変化の方向と程度とが同じであるかぎり、米1キロの価格は不変であってx円であるはずである。ところが、実際にはこの価格は、労働の生産性の変化以外の事情、たとえば米の需要と供給との不均衡というような事情によって、 $1.2x$ 円になったり、 $0.8x$ 円になったりして、米の価値量の表現としては過大または過小になることがある。そうなってもそれはやはり貨幣での米の価値量の相対的表現であり米と貨幣との交換割合の指標であって米の価格である。このような、価値量と価格との量的な不一致の可能性は、価格という形態そのものの本性に、さらには商品生産という生産形態そのものに、根差しているのであって、両者の一致はむしろ価格の過大と過小とのあいだの不断の振動の中心としてし

か現われないのである。(価値量と価格との背馳が一つの方向への運動ではなくて二つの反対の方向のあいだの振動だということは、この運動が無政府的な商品生産における需要供給の自動的な調整であり根本的には社会の総労働の無計画な部門間配分の不断の訂正の過程だということを意味するのであるが、これについては〈需要供給関係・市場価格〉の項で詳述される。)

さらにまた、価格という形態は、それが本来の性質とは矛盾して価値の表現ではなくなる、ということをも可能にする。本来は労働の生産物ではないもの、なんらかの労働の成果ではあるにしても社会的平均労働に還元されうるような労働の成果ではなく、したがって価値物ではないもの(たとえば芸術作品や独占可能な天然物など)にも、それが貨幣と交換されることによって価格が与えられ、商品形態が与えられる。このようなものは価値をもつことなしにただ形式的に価格をもつのであって、この場合には価格はいわば〈想像的なもの〉になる。このような商品の場合にはいわゆる〈需要供給の法則〉だけが価格を規制するのであって、価格はただ売買当事者の合意によって定まるにすぎない。しかし、たとえば土地のように不可欠な生産手段であると同時にその存在が有限で独占可能なものの価格は、いっさいの有限な生産手段と生活資料とを商品化し資本化する資本主義的生産様式のもとでは、この生産様式に適用するように特殊な法則によって規制されるのであって、これについては〈地代〉や〈土地所有〉の項目で詳述される。

→価値形態・価値尺度・貨幣・紙幣・需要供給関係・市場価格。

価格の度量標準 →価値尺度

架空資本(擬制資本) →利子生み資本

拡大再生産 erweiterte Reproduktion

I 剰余価値の資本化 = 資本の蓄積 資本家が取得した剰余価値を尽く生活のために消費してしまえば単純再生産が行なわ

れるだけであるが、これを一部分だけでも資本に再転化させれば生産は拡大された規模で再開されるのであって、これが〈資本の拡大再生産〉であり〈資本の蓄積〉である。それが行なわれるためには、社会の総剰余生産物のうちに新たな資本の物的構成要素となるべき各種の生産手段が含まれていなければならない。さらに、これらの物を資本として機能させるためには労働の追加も必要であり、それは労働時間の延長や労働強度の増進によって可能なこともありうるが、なんらかの事情のためにこの延長や増進がもはや限度に達していれば、新たな追加労働力を買い入れなければならない。資本主義的生産の機構は、労働者階級を労賃だけに依存して労働力を繰り返し売らざるをえない階級として再生産するのであり、労働力の価値どおりの通常の労賃は、単にこの階級の維持だけではなく、その増殖をも保証するに足りるべきものである。したがって、追加労働力の供給の可能性もまたこの再生産機構そのもののなかに含まれており、この追加労働力と追加生産手段とを合体させることによって生産規模の拡大＝資本の蓄積は実現されるのである。

Ⅱ 商品生産の所有法則の資本主義的取得法則への転化 剰余価値の資本化は、資本が他人の労働によって他人の労働を取得する過程を示している。追加労働力と結合される生産手段も、追加労働力を維持する生活資料も、剰余生産物の一部分にはほかならない。労働者階級は、自分自身の今年の剰余労働によって、来年自分から剰余労働を取り上げる資本を作り出すことになる。今では過去の不払労働の取得が、より大規模に現在の不払労働を取得するための唯一の条件になっている。しかも、これは商品交換の法則に従って行なわれる労働力の売買の必然的な結果なのだから、そのかぎりでは、商品生産と商品流通とにもとづく取得の法則すなわち〈私有の法則〉は、商品交換そのものに内在する矛盾によってその正反対物に転化しており、前提とし

ての等価交換はただの外観にすぎなくなる。なぜならば、労働力と交換される資本部分そのものが、無償で取得された他人の労働の生産物だからであり、この生産物がまたその生産者たる労働者によって単に補填されるだけではなくて新たな剰余を加えて補填されるのだからである。労働力の売買は流通过程での単なる形式にすぎないのであって、その内容は、資本家が繰り返し無償で取得する他人労働の生産物の一部分をまた繰り返しより多量の生きている他人労働と交換する、ということなのである。

ただ対等の商品所有者たちだけが対面しており、他人の商品を取得するための手段はただ自分の商品を引き渡すことだけであり、自分の商品はただ自分の労働だけによって生産される、というかぎりでは、所有は所有者自身の労働に依拠するものとして現われる。ところが、資本家と労働者とが対面するかぎりでは、所有は、資本家の側では他人の不払労働またはその生産物を取得する権利となり、労働者の側では自分の労働の生産物をわがものとするものの不可能性となる。つまり、所有と労働との結合から出てくる法則の必然的な帰結が、所有と労働との分離となるのである。だから、〈資本主義的取得様式〉は商品生産の本来の諸法則に反するかのように見えるが、それはこの諸法則の侵害からではなく反対にその適用から生ずるのである。個々の交換において等価交換の法則が守られているかぎり、商品生産にもとづく所有は少しも侵害されてはいない。それにもかかわらず、資本主義的生産の不断の反復、資本家階級と労働者階級との恒常的な交渉にあっては、取得様式はまったく変化している。賃金労働を基礎とするに至ってはじめて商品生産は一般的な社会的生産形態にまで発展し、そのいっさいの潜在的な力を展開して、それ自身の内在的諸法則に従って〈商品生産の所有法則〉は〈資本主義的取得法則〉に転化するのであって、

これが資本の蓄積の考察においてまず第1に確認されるべき本質的な点なのである。

Ⅲ 蓄積の規模を決定する諸要因 剰余価値は一部分は資本家によって消費され一部分は蓄積される。他の事情が不変ならばこの分割の割合が蓄積の大きさを決定する。そこで蓄積は資本家の消費の抑制の結果であるかのような外観が生じ、これが真実だとする俗説が現われる。(〈節欲説〉の項参照。) たしかに、資本主義的生産の発展は、生産規模の不断の拡大、したがってまた各個の資本量の不断の増大を必然的にし、競争はすべての資本家にただ彼らの資本を維持するだけのためにも絶えず資本量の増大を強制する。そして、資本家はただ剰余価値をますます多く資本として蓄積することによってのみ彼の資本を増大させうる。とはいえ、このことは資本家がますます彼自身の消費を抑制することを意味してはいない。剰余価値量を一定と仮定して、その消費と蓄積とへの分割だけを問題にすれば、資本家の消費抑制が資本蓄積量を決定する。剰余価値量そのものが絶えず増大するならば、すなわち、資本家ではなくますます多数の労働者が欲望の抑制を強要されるならば、資本家はますます多く消費しながらますます多く蓄積しうるのであろう。これこそが常にわれわれの眼前の事実なのである。さらに、消費と蓄積とへの分割が消費の相対的減少と蓄積の相対的増大との方向に向かう場合でさえも、絶対量としては両方とも増大することが可能であり現実でもありうる。

仮りに上述の分割比率を一定と前提すれば、蓄積量は剰余価値量によって決定され、したがって剰余価値量を決定するいっさいの事情によって決定される。(1)労働力の価値を割る労賃の引下げ。これは労働者の消費源泉を資本の蓄積源泉に転化させることを意味する。(2)労働日の延長。労働者数の増加なしに労働日の延長によって生産を拡大すれば、それが労賃の多少の増